

づらひつは、たてを丸藤にして、ぬきをわり藤にして組たる也。四方の角々とふちはなめし革にて包む也。今はつゞら藤にて作りたるは少し、竹籠を紙にてはり、又は檜の木の薄板にて作り、紙にて張たるも多し。

〔享祿本類聚三代格〕四太政官符

定内匠寮雑工數事略○中 黒葛篋二人略○中

大同四年八月廿八日

〔調度歌合〕八番 右

人めのみまげき深山を分わびてゆき、休まぬつゞらをり哉

〔嫁入記〕一おつゞら、これはいろくの御てぐさの物入也。略○中

一つゞらのをはくみなり、

〔大館常興日記〕天文八年閏六月十三日、御公事方記録已下御箱二、并つゞら三、當時御倉万松軒被

仰付之、正實居住之間正實に申合、御倉へ可入置申哉段、御内談衆申談之。略○下

〔和漢三才圖會〕三十二葛籠 俗云豆豆良

按、葛籠織藤蔓作之、以藤心爲經、以皮爲緯、自藝州廣島多出之、其四隅著皮漆髹之、凡宿直泊番人、每納寢衣名番葛籠、小者名伏見三寸、民家嫁婦必用之、衣籠也、其賤者贗革也、出於江州高宮少出之、經緯用純藤組之、故剛鞫而佳、

〔好色五人女〕三こけらは胸の焼付さら世帯

縁の約束を極め、略○中 二番の木地長持ひとつ、伏見三寸の葛籠一荷、糊地の挾箱一ツ、略○中 取あつ

め物數廿三、銀二百目付ておくられる、

〔本朝世事談綺〕器二用、萬年葛籠

つゞら